



海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ⑩)

高島 敬明

今回は、寺島儀蔵さんにスポットを当てて書いていきます。彼は当時のソ連が指導する共産主義に未来の希望を抱いて越境入国したにも拘わらず、思わぬ運命に翻弄され苦難の道を如何に歩んで行ったか、一方で望郷の念が強まるばかりとなった人生について本人の語り口に沿って見て行きます。従って話が前後したり、記憶違いがあるかも知れませんがその点で容赦ください。

「私は、東京大学3回生で日本共産党員だった時、仲間と鶴見の激しい労働争議に参加しました。その争議が終わってから危険人物として特高(特別高等警察)が四六時中身边を監視し、付きまとわれるようになりました。いつも顔を合わすわけですから、いつの間にか若い警官とも仲良くなって行きました。札幌に帰郷していた昭和10年(1935年)秋頃、若い警官から『寺島さんこれから一週間講道館で柔道の試合があるのでじっとして下さいね』と、何回も念を押され『分かりました』と答えました。ようやくチャンスが来たのだと、すぐに身の回りの用意をして、両親へ自分の写真など形見として残し、札幌駅に急ぎ、まず夜行列車に乗り込み稚内に行きました。北海道の地政学上まず樺太(サハリン)を目指し、連絡船に乗り樺太の豊原(ユジノサハリンスク)に着き、国境に通じる国道をまっしぐらにバスで北上しました。【注・当時樺太は1905年(明治38年)に日露戦争に勝利し北緯50度以南は日本の領土になっていた】国境が近くなってバスを降り、国道から200m位の林の中を進みました。短靴のくるぶしあたりまで苔の冷たい水に浸かりながらざくざくと音を立て先に進んで行き、やっと国境に着いたのです。日本側の警備は手薄で簡単にソ連側に着きました。高さ8mくらいの塔の上にソ連兵が機関銃を構えて警備していましたが、異常に気付いたソ連兵にすぐに逮捕され手荒に手錠を掛けられました。その日のうちに船に寄せられソ連

本土に送られ、シベリヤ鉄道で厳重な監視のもとモスクワに運ばれました。すると待遇が一変し、クレムリンの一室を与えられ日本のソ連大使館でコックをしていた人が食事などの世話に就く厚遇を受けました。それから2~3年はその状態が続き、その間北京に行き日本共産党の幹部の方々、T氏、M氏、N氏…何人かの方に会って会談をしました」。

その方々には何度か会われたようでしたが、話しぶりが目下の人を呼ぶように、T君、M君、N君などと親しそうに話されていました。

「モスクワでの生活を送っていたある日の事です。第二次世界大戦が近づいたころ非常に世情が悪化してきました。心配していた矢先何も悪いことはしていないのにスパイ容疑で逮捕・収監され、裁判の結果死刑の判決を受けシベリヤの強制収容所に送られることになったのです。収容所を転々とする中、何回も死刑の判決を繰り返し宣告されました。ある監獄では5人ぐらい入っている石牢で、周りを見れば写真に出ていた大臣だった人、元帥だった軍人、高名な一般人が膝を折って座っていました。時間が来て一人一人呼ばれていきますが誰一人帰って来ることは有りませんでした。皆さん分かっていたましたが、私の隣の人は全て処刑されたと話していました。なぜか私のところで呼び出しがいつも止まり、死刑は免れてきました」。

ここまで聞いてから質問しました。

「罪状は何だったのですか? 身に覚えは有るのですか?」

寺島さんは、

「身に覚えのないスパイ罪で裁判にかけられました。貶められたのです」

とうめくように言われました。裁判の度に死刑判決が出るので都度大変怖い思いをされたようです。さらにこのような事を話されました。

「監獄での緊迫した日々が続きましたが、刑はど

ういう訳か25年に短縮され、強いられた監獄生活も18年で終わることになりました。この時46歳でした。その間に同じラーグリの囚人だったラージャと釈放後にふとしたことで再会し、連れ子の男の子共々結婚し、モスクワで主に通訳で生計を立てていました。生活が安定したとはいえ、望郷の念は次第に強まるばかりでした。釈放後、何度も帰国の嘆願をしたのですが全く相手にされませんでした。そのような時次のようなニュースを聞きました。岡田嘉子さん(脚注参照)に関するニュースです。当時日本で人気のあった大女優の岡田嘉子が愛人と樺太から同じように共産主義の理想に憧れ昭和13年にソ連に越境しました。愛人はまもなく処刑されたのですが、岡田さんは10年くらい監獄で過ごした後モスクワの病院で看護婦をしていたそうです。その後月日が経ったある時、岡田嘉子さんが日本に一時帰国したニュースを聞きました。自分もと勇んで日本大使館、ソ連当局にビザの発給を求めましたが回答は一回もありませんでした。それでもと繰り返し申請をしました。がすべて回答は有りませんでした。人伝に聞こえてくるのは、岡田さんの場合は日本の政治家、国会議員など多くの人が身元保証人になりやっと実現したとのことでした」。

と、やるせない表情でお話しになりました。私は、寺島さんは北京で共産党の幹部とも話す機会も持ち、しかも共産黨員なのになぜ共産党の国会議員などが保証人にならなかったのか、と思うばかりでした。思い起こせば、ノーベル文学賞のソルジェニーツィンも「収容所列島」にあるようにシベリア送りの受刑者でした。シベリアに送られた人は国外には絶対出さないのが原則です。ノーベル賞の授賞式にも出席できなかったのです。ただ当時1ルーブルが300円の時代に、ソ連の一般の人が月30ルーブルの年金であったのに対し、シベリアに送られ釈放された人は月80ルーブルの年金を貰い破格の待遇だったと言います。国家の恥じになるようなことを国外で話されないよう国内で生活して欲しいと言うことでしょうか。

あるとき私は、「寺島さん、ソ連に来て本当によか

ったのですか？ 寺島さんの人生は幸福だったのですか？」と聞いたことがありました。長い沈黙があって次のような返答がありました。「高島さん、私はモスクワで通訳をしていました。日本から多くの国会議員の方、偉い学者の方々が理想の社会の見学に来られました。学校、幼稚園、病院と多くの施設をご案内しましたが、日本に帰られる時には今までの考えを変えて帰られる方が多くいました」。これが答えだったように思います。このように間接的に自分の意見や意思を表現することがしっかり身に付いていたようです。今回はここまでで終わります。最後に「岡田嘉子」について経歴などを紹介します。

(続く)

【岡田嘉子】 女優、アナウンサー。1902年広島市で生まれ、1992年モスクワの病院で逝去。(享年89歳) 東京・女子美術学校西洋画科に入学。1917年父が小樽の「北門日報」の主筆に招かれ、彼女も卒業後「北門日報」の婦人記者となる。1919年父が芸術座の北村抱月や劇作家の中村吉蔵等と知り合いだったこともあり父と一緒に上京した。そうした関係でこの世界に入り、際立った美貌も相俟って評判となり一気にスターダムの頂点に立った。サイレント映画時代のトップ女優。後年、人気番組「徹子の部屋」にも出演。

岡田は、多くの浮名を流したが共産主義者の演出家・杉本良吉と激しい恋に落ち、昭和13年(1938年)1月厳冬の樺太からソ連に越境した。過去にプロレタリア運動に関わった杉本は執行猶予中で、召集令状を受ければ刑務所送りになることを恐れ岡田嘉子とソ連に不法入国した訳である。しかし二人へのソ連の対応は厳しいもので、3日で二人は別々の収容所に引き離され杉本はこの年の10月スパイ罪で銃殺刑となった。

岡田は自由剥奪10年の刑となった。月日は流れ、1972年、70歳の時東京都の美濃部都知事らの働きかけで帰国することが出来た。(この時寺島さんは63歳)日本でも活躍したが、やはりソ連で暮らしたいとモスクワに戻った。



岡田嘉子 (Wikipediaから)